世界の子育て事情

ラオス人民民主共和国
Lao People's Democratic Republic

独立行政法人 国際協力機構 JICA北陸の元青年海外協力隊の村落開発普及員として、東南アジアのラオスに派遣されていた大森裕子さん（石川県）に、現地の子育てを語っていただきました。

地域で子育て

現代の日本とは違って、人も時間もスローペースで穏やかなラオス。そんなラオスの子育ては何と言っても「地域で育てる！みんなで育てる！」ではないでしょうか。

子どもの数が多いラオスでは赤ちゃんをよく見かけます。しかしその赤ちゃんを抱いているのはお母さんとは限りません。

家族、兄弟、親戚、近所・地域の誰かが抱っこしていて、「この子の本当の母親は誰なんだ？」と感じたことが幾度となくありました。その時できる人が世話をする、それがラオスの自然な形です。

赤ちゃんと出勤

ラオスで生活するうちに「常識」が見えてきました。それは、日本ではなかなか考え難い〝職場へ赤ちゃんを連れて行く〟常識です。私がいた教育局でも職員が赤ちゃんを産めば、その職員は赤ちゃんと同伴で出勤。小学校の先生たちも同様でした。

それでは、その先生が赤ちゃんから手を放さなければならない時は、どうするのか？。もちろん、クラスの生徒に見てもらうのです。日本ではあり得ないことだと思いますが、ラオスでは、どこにでもある光景でした。

兄弟で助け合う

ラオスでは、上の子が下の子どもの面倒をよく見ていることに感心しました。まだまだ自分が面倒を見てもらわないといけないような年齢の子どもでも、弟や妹ができれば、しっかりとその子の面倒を見ています。

親も過剰な干渉はせず、兄弟たちに任せています。そんな環境で育っているためでしょうか、家事はもちろん生活する力や周囲と協力し、助け合う心が自然に育まれているのだと思います。

想像する力を

日本では、小さな子どもが危険なことに合わないよう、大人が未然に防ぐのが重要なことだと思っていました。確かに大切なことではありますが、過剰になるのはいけないのだとラオスで感じさせられました。

１歳を過ぎたくらいの赤ちゃんに先の細いペンやハサミをおもちゃ代わりに遊ばせていたのを見たことがあります。これは極端な例かもしれませんが、ある程度の年齢に達した子どもには「何でもだめだめ」と制止するだけではなく、自分で危険を察知する力を身につけさせる、そのことが、子どもたちに〝自分で考える力・想像する力〟をつけるのでは、と考えさせられたラオスの子育て事情でした。

協力：JICA北陸